

武蔵野 国木田独歩記

神野 幸人

(会員 鎌倉市台)

平成十三年三月八日の毎日新聞に国木田独歩『武蔵野』から百年として別紙文評がのつていた。評論家は独歩が第六章で詳細に述べている小金井堤を記してないので、桜の頃の小金井三里の長堤を訪れる事にした。

平成十三年四月八日(日)

『今より三年前の夏の事である。自分は或友人と市中の寓居を出でて、三崎町の停車場から境まで乗り、其処で下りて、北へ真直に四、五町ゆくと桜橋という小さな橋がある』

『それを渡ると一軒の掛茶屋がある。この茶屋の婆さんが自分に向て「今時分、何にしに来ただァー」と問うた

事があつた。自分は友と顔見合せて笑て「散歩に来たのだよ、ただ遊びに来たのだ」と答えると、婆さんも笑て、それも馬鹿にした様な笑ひかたで「桜は春咲くこと知ねだね」と言つた』

『其処で自分は夏の郊外の散歩のどんなに面白いかを婆さんの耳にも解るやうに話して見たが駄目であつた。東京の人は呑気だといふ一言で消されて仕了つた』

『茶屋を出て、自分等はそろそろ小金井の堤を水上の方へとのほり初めた。その日の散歩がどんなにたのし樂しかつたらう。成程小金井は桜の名所、それで夏の盛に其堤をのこのこ歩くも餘所目には愚かに見へるだらう。しかし其れは、未だ今の武蔵野の夏の日を知らぬ人の話である』

『……長堤三里の間、ほとんど人影を見ない……両側の林、堤上の桜、あたかも雨後の春草のやうに鮮やかに緑の光を放つて来る……』(明治三二年一月)

三崎町の停車場とは今の飯田橋のこと。境とは武蔵境のことで、当時飯田橋より立川まで甲武鉄道が通つていたという。



国木田独歩文学碑

『今より三年前の夏の事である。自分は或友人と市中の寓居を出でて、三崎町の停車場から境まで乗り、其処で下りて、北へ真直に四、五町ゆくと桜橋という小さな橋がある』

玉川上水は承応三年（一六五四）江戸の上水道として開かれ、堤の桜は元

文年間（一七三六）

一七四二）に川崎平

右衛門が中心になっ

て植えたと伝えら

れている。

桜橋を三kmほど

川上へとのぼると

二五万坪の（旧佐伯

海軍飛行場跡八四

二、二一二m²に匹

敵する？）小金井

武蔵境駅、北口の商店街は独歩通りとて今も独歩を敬

している。その商店街を通過して閑散としたところ、玉

川上水を渡る橋が桜橋である。小さな橋だが近年新しく

したのか橋の歩道は大理石できれいだであるが、橋のたも

とは青木や雑木雑草でおおわれている。其の中に独歩の

碑石がある。側の国木田独歩碑の碑柱がなければ、何だ

か分からぬ存在である。碑文も掘り浅く判明しにくきは

残念である。その川上に独歩橋と名づく橋がある。碑文

下記のごとし。

桜植林 一七三六

約一六〇年

独歩散策 一八九七

約一〇〇年

現在 二〇〇一

明治三十年

平成十三年



小金井公園



小金井堤

れずその散りそめし花びらのもと数千の人が礼儀正しく、静かに夫々の宴を楽しんでいた。東京の数ある桜の名所（上野の山・皇居千鳥が淵・向島）の中でも一味違った武蔵野の広大さを味わえるすばらしい公園で、園内には江戸東京建物園もあり、由緒ある建物が十数棟配置され、武蔵野の道のその奥は樹林ゾーンとて昔の原野を保存している。

公園を出て又堤に戻る。ここで初めて気が付いたこと

公園がある。その一部の桜広場には樹齢一〇〇年をこすであろう桜その数数え切



は、両堤の桜並木の更に内側即ち川岸に無数に植えられた櫻の木が長身・大木となって、景観を壊していることである。漸くその愚に気が付いたのか、処々に櫻を切った切り株が目立っていた。

堤と平行に走る五日市街道と府中街道が交差する小平桜橋で堤は向きを変えたが、その間四km境桜橋より計すれば約七km、独歩が『長堤三里の間』と記しているのは、この間の事だろう。

境桜橋より万朶の桜の小金井公園、そして小平桜橋と三時間の探索を終えて野趣ある料亭四季亭で遅い昼食をとる、冷えしビール六腑にしみる。

鎌倉より小金井まで独歩の足跡探す馬鹿げた夫婦がここにいる。そんな馬鹿な夫婦のガイドと更に昼食までご馳走して戴いた矢代幸恵・和子ご夫婦に厚く厚く御礼申し上げます。武蔵野独歩の足跡探索は生涯の思い出となるでしょう。

※次回は独歩と同じように誰も散歩しない夏の小金井の堤と、記はないが独歩がよく訪れたという雑司ヶ谷の鬼子母神辺りの探索をしたいと思います。

(平成十三年四月十日)

〈消息往来〉(昔、寺小屋で使われた消息文の教科書)

これは明治二十年前後の池田・長谷村(岡ノ谷、水ヶ谷、蛇崎など)の池田学校で使われていた教本の一つで中級程度のものである。今、読んでみても古文書解読をする上で、大変重宝なものである。漢文体で返り点、送り仮名が付けられている上、漢字にも読み仮名がふつてあり、また例えば敬称の「様」については、上々さま方、貴公さま、御手前さま、御自分さま等では、夫れぞれ書き方が異なるのも面白い。また読み仮名があるので、「移徙」をわたまし、「邂逅」をたまさかと読んでいたことも判るので、大変便利である。一つ残念な事はこの消息往来は中程と終りが一枚ずつ欠けている。それでも毛筆で書いてあるので貴重である。もし読んでみたい方が居られば、コピーをお分け致します。(高藤達喜)

消息往来
凡消息之通音信者皆由
吾之所達國長遠不設何
車人間為信者其也先
書狀亦文字紙亦扱又字
一筆略上仕好信在合啓
親又之紙中入言書言物
貴筒貴札古狀若書信(面紙
上曾紙拜見披閱致仕今
為叔又時候正月去青湯
春寒未解氣難去二月六
春近自春暖暖字ね信三月去